

# 英語学分野の卒業研究を振り返って

Review of the Students' Graduation Studies in the Field of English Linguistics

西部真由美

NISHIBU Mayumi

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail: mnishibu@vega.aichi-u.ac.jp*

## Abstract

This paper aims to review three distinguished graduation studies written by the present author's seminar students. Hirano (2015) analyzed Japanese learners' usage of English discourse markers by video-recording the English conversational sessions of college students. Fukaya (2014) focused on the changing names of occupations, using a chronological American English corpus, and conducted a frequency analysis and a collocational analysis from a politically correct viewpoint. Oshima (2013) investigated learners' in/correctness in the countability of English words through questionnaires to 40 Japanese learners of English.

## 1. 言語コミュニケーション学科（現：英語学科）の卒業研究

愛知大学国際コミュニケーション学部は設立 20 周年の節目を迎える。筆者が赴任したのは 2011 年であり設立当時の様子は知り得ないが、少なくとも言語コミュニケーション学科（現：英語学科）の毎年恒例の最大のイベントは、「卒業研究」であると思われる。卒業までの最後の難関あるいは集大成として、学生は 4 年次に卒業研究に取り組む。全員が、20 ページ程度の卒業論文を英語で執筆して提出し、口頭試問に臨まなければならない。自分で選んだテーマについて、ほぼ 1 年をかけて資料収集、調査、データの分析を行い、英語の学術論文形式でまとめるのは、学生には至難の業である。ゼミを担当する教員の我々も、ゼミの学生が論文を完成するまで身を削って指導している。

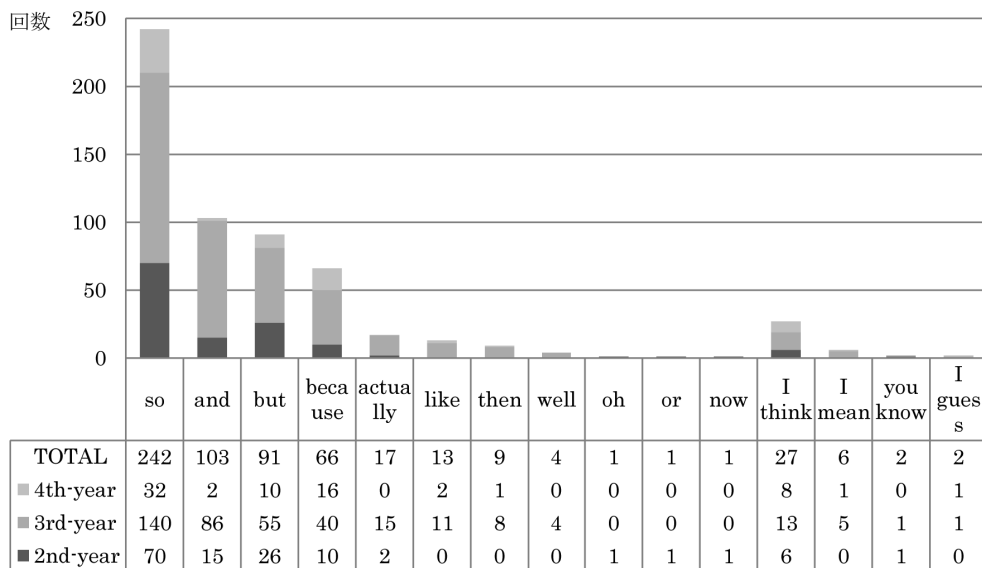
学生の中には、自分の大学生活の記念になるような論文を書きたい、良い評価を得たい、密かに学科で最優秀賞（学会賞）を狙っている、という希望や野望を抱きながら真摯に卒業研究に取り組む者も少なくない。そして、多くの学生が、口頭試問後に卒業が確定すると、苦勞しながら一生懸命に卒業論文を書いたことが大学生活の一番の思い出となり、大きな達成感を得られたと語ってくれる。

実際に、学部生のレベルを超えて、一流の研究論文とも言える成果を残す学生もいる。学会賞を受賞した論文は製本され国際コミュニケーション学会事務局の書庫に保管されるのだが、人目に触れることがなく発表の機会がないことが残念でならない。そこで、本稿では筆者のゼミの学生が取り組んだ研究論文で学会賞を授与された3篇を紹介し、その研究の意義を考えてみたい。

## 2. Discourse Markers in the Conversation of Japanese Learners of English (Hirano, 2015)

### 2.1 研究の内容

2015年度の学会賞を授与された平野秀哉氏による *Discourse Markers in the Conversation of Japanese Learners of English*（日本人英語学習者の会話における談話辞）を紹介する。この研究では、本学言語コミュニケーション学科の2年生から4年生の学生合計48人、総



(Hirano, 2015; p.10)

図1 日本人英語学習者の使用した談話辞の租頻度

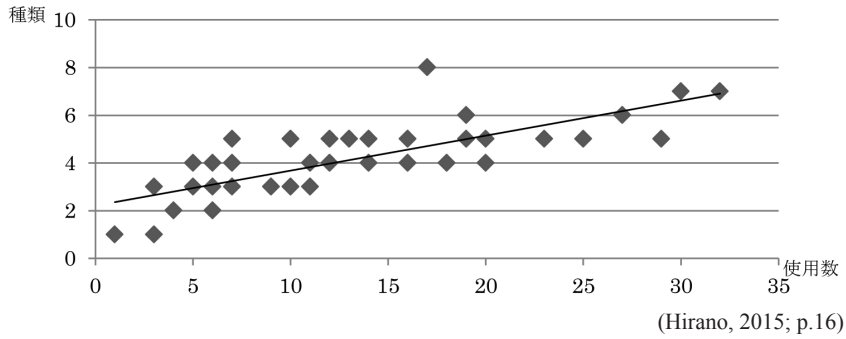


図2 談話辞の使用総数と種類数

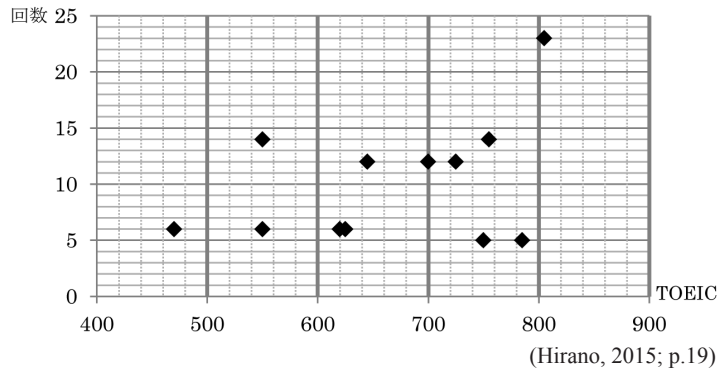


図3 TOEIC のスコアと談話辞の租頻度

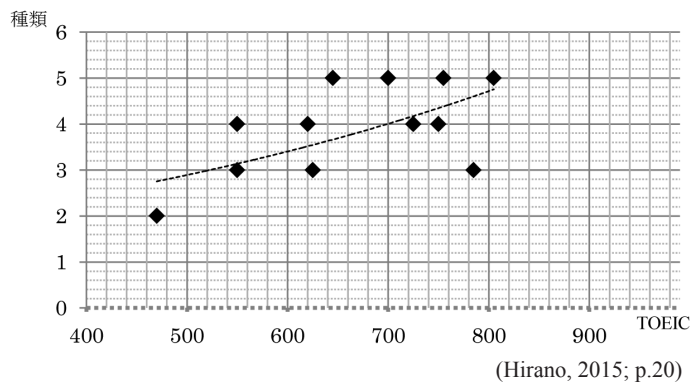


図4 TOEIC のスコアと談話辞の種類数

時間 140 分の英語の会話場面をビデオで撮影し、各参加者の発した英語の談話辞についてその種類と頻度を分析している。

研究の第 1 章では、英語母語話者の談話辞の使用状況に関する先行研究 (小林, 2013) に言及し、母語話者の談話辞の約 72% は like であり、次いで you know, I mean が 6% 程度

であると述べている。

そして、第2章以降では、日本人英語学習者の談話辞の使用には独特の特徴があることを明らかにした。日本人学習者の場合、特に *so*, *and*, *but*, *because* が過剰使用され、全て接続詞であることを指摘している。被験者が発した談話辞は図1の通りで、被験者全員が使用した租頻度の総計が項目別に示してある。

この研究では、談話辞の粗頻度だけでなく種類の数に関しても、学年、英語技能のレベルなどの要因も考慮に入れながら分析している。まず図2では、談話辞の粗頻度と種類の数に比例の相関を認めている。発話中に談話辞を多く使う学生ほどその種類も多様である。

次に、被験者のうち TOEIC のスコアが明らかになっている 12 名の各々に関して、談話辞の使用頻度および種類の数の間の相関を探っている。図3が示す通り、TOEIC のスコアと談話辞の使用頻度との間には相関は見られなかったが、その一方で図4が示す通り、TOEIC スコアと談話辞の種類の数には相関が認められ、スコアが高い学生ほどより多量の談話辞を使用していることが判明した。

## 2.2 研究の評価

日本人英語学習者の会話における談話辞の実証的研究はまだ多くは行われておらず、学習者の英語技能レベルに比例の相関があるのは談話辞の種類の数で、頻度には相関がないという指摘はきわめて興味深い。

また、日本人英語学習者が談話辞として接続詞を過剰使用し、中でも *so* が突出して使用されること、またそれは母語の副詞「そう」の影響が考えられることを説明している点も注目できる。

この研究は、3年次の春休みの下準備に始まり、データを収集して統計処理をし、執筆するまでに相当の時間と労力を費やしてなされた研究である。英会話の授業を担当する教員に手紙を書いて許可を得たのち、各教室に出かけて行ってビデオで会話の様子を撮影し、そのビデオを緻密に観察して会話に参加している学生全員の発した談話辞を手作業でカウントしていく。そしてそれをエクセルに入力して数値の相関を測るといった表計算ソフトを操る力も要求された。学部生としては、きわめて多くの技能を発揮してできた論文であった。

## 3. Gender in English Names of Occupations (Fukaya, 2014)

### 3.1 研究の内容

次に、深谷美月氏による *Gender in English Names of Occupations* (英語の職業名におけるジェンダー) を紹介する。この研究は、ジェンダーの観点から変化しつつある英語の職業名の使用状況を、アメリカ英語コーパス (*Corpus of Historical American English*) を用いて量

的・質的に分析したものである。第2章では5種類の男性・女性・両性の形態がある職業名の1960年代から2000年代の使用頻度の変化、第3章では職業名につながるコロケーションから読み取れる職業に対するイメージを詳細に調査している。研究の対象にした職業名は以下の通りである。筆頭にあるのが性別を問わない中立的な語彙で、括弧の中は同じ業種を表す男性名詞・女性名詞である。

- (1) a. flight attendant (客室乗務員) (steward/stewardess)  
 b. homemaker (主婦/主夫) (househusband/housewife)  
 c. nurse (看護師) (male nurse/female nurse)  
 d. police officer (警察官) (policeman/policewoman)  
 e. server (給仕人) (waiter/waitress)

この(1)に挙げた5種類の語彙について、アメリカ英語コーパスにおける出現頻度の変遷を10年ごとに調査した結果、次の図5から図9の通りになった。なお、数値は100万語当たりの頻度である。

まず、a) flight attendant, steward, stewardess に関しては図5が表す通り、1970年代には最も多かった stewardess がそれ以降は減少の一途をたどり、逆に flight attendant が次第に増加して2000年代で最大の使用頻度になっている。これは、性別を区別する語彙が中立的な語彙に置き換わったことを示している。

次にb) homemaker, househusband, housewife について、その頻度変化を表したのが図6である。中立的な語彙 homemaker が使用されているものの定着して置き換わったとは言えない頻度であるが、housewife というやや軽蔑的な意味合いのある語彙の使用が1970年代以降は減少していることが分かる。

図7は、c) nurse, male nurse, female nurse の使用頻度の変遷を示している。看護師とい

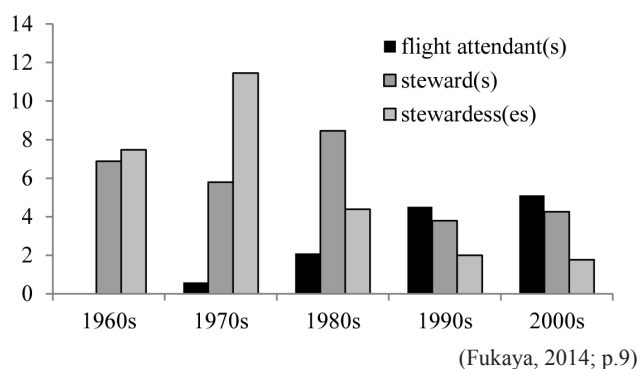


図5 flight attendant, steward, stewardess の頻度変化

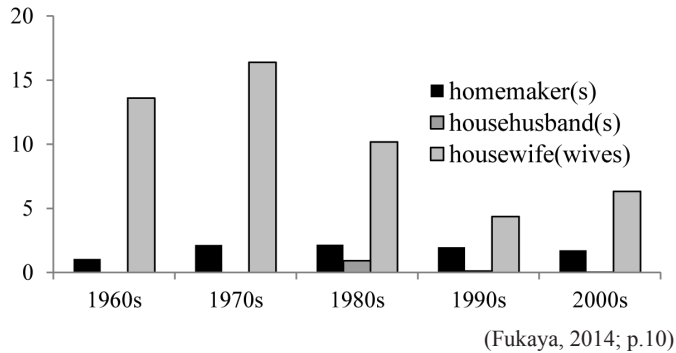


図 6 homemaker, househusband, housewife の頻度変化

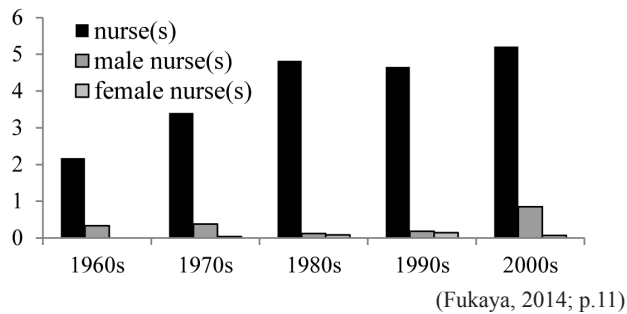


図 7 nurse, male nurse, female nurse の頻度変化

う語彙 nurse の場合には、男女の区別をする際には male/female という形容詞を前置して明示する。社会背景から女性が多い職種であったが、この分野での男性の進出が増えたため、male nurse という表現も若干増加していると言えよう。同時に、nurse という語彙が単独で男性・女性をとともに含意する語彙へと変化しているとも言えるだろう。

図 8 は、d) police officer, policeman, policewoman の頻度変化を示したものである。1970 年代は policeman の頻度が最大であったが、1980 年代に半減して以降、徐々に減少している。代って police officer の使用が年々増加し 2000 年代で policeman の頻度とほぼ同頻度まで増加してきている。一方で、1960, 70 年代に少数ではあるが使用されていた policewoman が 1980 年代からは極め稀になったことにも注目したい。

最後に、e) server, waiter, waitress の頻度変化を見てみよう。図 9 では、1970 年代をピークに waiter が減少し waitress が増加して 2000 年代にはほぼ同頻度になっている。これは、給仕の職種で女性が進出してきた社会変化を反映していると思われる。また、僅かではあるが server という中立的な表現も 1990 年代から増加しているが、その頻度は対立する 2 つの語彙の 4 分の 1 程度でしか定着していないことがわかる。

この研究の第 3 章では職業名を表すこれらの語彙のコロケーション分析を行っている。

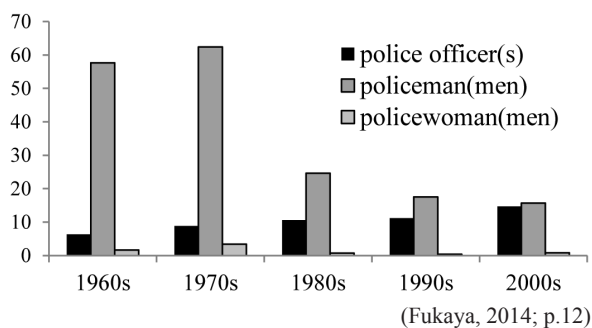


図8 police officer, policeman, policewoman の頻度変化

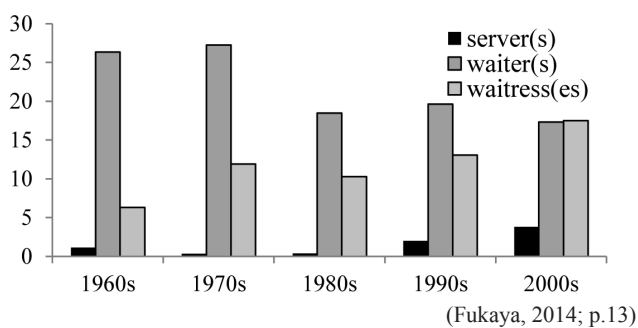


図9 server, waiter, waitress の頻度変化

特に、前に置かれる形容詞と後に来る名詞について、詳細な語彙頻度表を提示して解説している。特筆すべき点は、stewardess, waitress には pretty, young, cute, blond, beautiful のような外見や容姿を肯定評価する形容詞が来ていること、nurse, police officer には専門性を表す形容詞が多くジェンダーの偏りが見られないこと、homemaker の後に来る名詞は mother, mom, wife など、やはり女性が多いことで、アメリカ社会の状況を反映した結果となっている。

### 3.2 研究の評価

この論文は、職業名の使用状況を通じて、アメリカの社会の変化や職業に対する固定観念を映し出そうとする社会言語学的研究である。分析結果から、アメリカで起こった第二次フェミニズム運動や1980年代からの Political Correctness の推進に伴って両性名詞の使用が増加し女性名詞が減少している反面、両性名詞が推奨されても言語として定着が進んでいないものがあること、依然として職業によって男性あるいは女性の職業であるという偏ったイメージがあることがわかった。

米語の経時的コーパスを使用して、技術と根気を要する検索作業に挑み、自分の抱く疑

問点を徹底的に追及し、興味深い事実を導き出した。ジェンダーの観点から、職業名の年代変化にコロケーション分析も加えたことで、より緻密な研究となり、学術的にも大変評価できる論文となった。

## 4. On Learner's Errors in the Countability of English Nouns (Oshima, 2013)

### 4.1 研究の内容

最後に、大嶋菜都美氏による *On Learner's Errors in the Countability of English Nouns* (英語名詞の可算性における学習者の誤りについて) を紹介する。この論文は、英語の(不)可算名詞と、それが状況により可算になったり不可算になったりする現象に着目し、日本人学習者がどの程度まで英語の可算・不可算を母語話者と同程度に使い分けられるのか、自作のアンケートを実施して調査をまとめたものである。

第1章では可算・不可算名詞を概略的に説明し、2章ではアンケートの手続きを述べ、3章ではその結果をまとめて考察を行っている。被験者は合計40名で、中学3年生13名、高校生13名、大学生14名である。アンケートを取る際には、事前に被験者に対して英語の可算・不可算の大まかな説明をして、可算・付加算の二択でどちらかを選ぶ形式を取った。名詞単独で加算・不加算を選んでもらう形式と、文とイラストを与えて二択で選択させる形式がある。アンケートで取り上げた名詞と例文は以下の通りである。

#### (2) 通常不可算扱いされるもの

homework (宿題)、furniture (家具)、advice (アドバイス)、oil (油)、dust (ほこり)、music (音楽)、rain (雨)、sand (砂)、paper (紙)、news (ニュース)

#### (3) 通常可算扱いされるもの

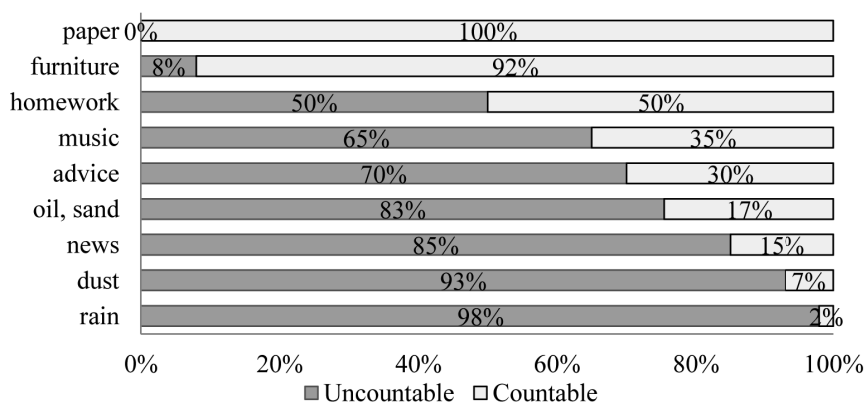
dog (犬)、team (チーム)、day (日)、city (市、街)、pencil (鉛筆)、cookie (クッキー)、house (家)、picture (写真)

#### (4) 文脈によって変わる問題 (下線が正解)

- a) I like (a coffee/coffee). 私はコーヒーが好きです。
- b) Can I have (a coffee/coffee)? コーヒーを1杯もらえますか?
- c) I eat (an egg/egg) for lunch. 私は昼ご飯に卵を1つ食べる。
- d) You have got (an egg/egg) on your tie. 君のネクタイに卵がついているよ。

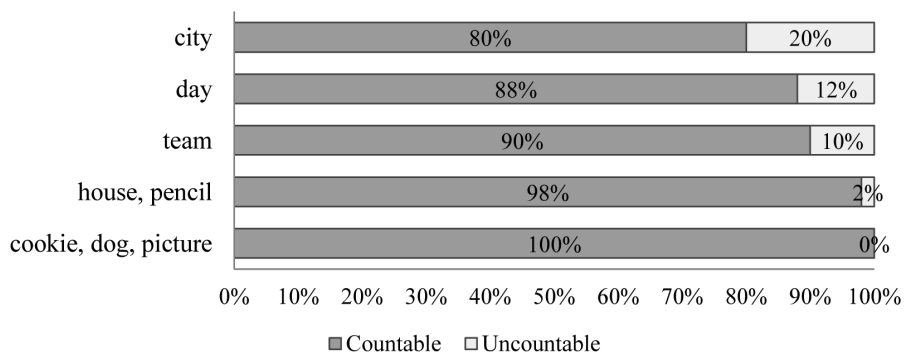
通常不可算扱いされる(2)で示した名詞のそれぞれについて、被験者に加算・不加算のどちらかに回答してもらった結果が図10である。この場合、uncountable (不可算)が





(Oshima, 2013; p.12)

図 10 通常不可算名詞 (uncountable) の回答結果



(Oshima, 2013; p.13)

図 11 通常可算名詞 (countable) の回答結果

正解となる。

実に被験者全員が物質名詞の paper を不可算とは考えておらず、可算名詞と誤解をしている。次に、集合名詞の furniture を不可算ととられず、homework でも半数の正解しか得られていない。反対に、形を成さない物質の rain, dust, sand や液体の oil、情報を表す news, advice は比較的正解率は高かった。

可算名詞である (3) の名詞の正解率は図 11 の通りであった。可算 (countable) が正解となる。先に挙げた不可算名詞の場合と比べて全体的に正解が多いことがわかる。

誤答率で見ると、2割弱が city, day を誤って不可算ととらえていた。これらの単語は時間や平面を表していて、他の名詞と比べて形や境界がとらえにくいことが誤答の原因ではないかと、大嶋は指摘している。

文脈によって可算・不可算が変わる問題 (4) では、以下の通りの正解率が得られた。

- (5) 正解率 a) I like coffee. (60%)  
b) Can I have a coffee? (77%)  
c) I eat an egg for lunch. (83%)  
d) You have got egg on your tie. (68%)

アンケートの説明文にコーヒー 1 杯や卵 1 個と添えてある可算の用法では 8 割前後の正答率が得られたが、物質としてとらえる不可算の用法では正答率は 60% 台と低くなっている。従って、日本人英語学習者は名詞を一旦可算と認識すると状況に応じて不可算になることを認識するのが難しいことがわかる。

#### 4.2 研究の評価

この実証的研究では、日本人英語学習者の可算・不可算の正答・誤用の状況を明らかにし、その原因も説得力を持って解説している。特に、学習者は名詞を過剰に可算ととらえて不可算にしない傾向と、明確な境界の存在の有無が（不）可算の判断に影響することを明らかにしている。日本語には可算・不可算の区別は顕著に言語に表れないため、英語の可算・不可算の概念の習得は難しいと言われている。この研究の執筆者自身もこの区別を困難と感じ、他の日本人英語学習者はどの程度まで理解しているのか疑問に思ったことが研究の動機となり、優れた論文となった。

### 5. おわりに

学会賞を受賞する卒業研究は、学生の労を厭わない努力の結晶であり、新たな発見と知見に富んでいる。このような優秀な論文は他にも多数あり、公に発表できる機会が与えられるべきではないのか。また、学部設立 20 周年を機会に、このような形で多くの人に紹介できたことを嬉しく思う。

#### 参考文献

- Davies, Mark (n.d.) *Corpus of Historical American English (COHA)*. Brigham Young University: <http://corpus.byu.edu/coha/>
- Fukaya, Mizuki (2014) *Gender in English Names of Occupations*. (Unpublished graduation thesis). Faculty of International Communication, Aichi University.
- Hirano, Shuya (2015) *Discourse Markers in the Conversation of Japanese Learners of English*. (Unpublished graduation thesis). Faculty of International Communication, Aichi University.
- 小林 隆 (2013) 「アメリカ人大学生の談話標識使用傾向 —— タフツ大学の学生への調査から ——」『金沢

大学文化資源学研究』 vol.12, pp. 158-164.

Oshima, Natusmi (2013) *On Learner's Errors in the Countability of English Nouns*. (Unpublished graduation thesis).  
Faculty of International Communication, Aichi University.